

日中関係を第三の視点から見る——本セッションのねらい——

砂山 幸雄
(愛知大学)

最近の日中関係を「政治は冷たいが、経済は熱い（政冷経熱）」と言い表すのは、もうすっかり陳腐化した感がある。そればかりでなく、日本人のなかにはそれが指し示す状況の異常さに鈍感になり始めている気配すら見受けられる。日本の対中貿易総額は今年上期にはついに対米貿易をしのぎ、経済面での相互依存は後戻りできない段階に達している。人的交流、文化交流も依然として活発であり、両国最高首脳相互訪問が数年間途絶えていたとしても、「向こうが望まないときに私が訪中する必要はない」と言い切る小泉首相の態度にさほど批判の声もあがらないのが最近の日本である。中国でも事情は似たようなものであろう。しかし、国家関係が悪化すれば、首脳の間での意思疎通を通じて信頼回復に努め、事態の悪化をくいとめるのが指導者たるものの責務というものではないか。

このような異常な状態に陥っている日中関係を日中以外の第三者の立場から見るとどのように映るのだろうか。今日、日中政治関係を凍らせている主要因の小泉首相の靖国参拝問題や歴史認識問題に対して、あるいは尖閣諸島（釣魚島）の領有権問題や東シナ海でのガス田開発の問題について、当事者たちより冷静かつ公正な視点をもって語ってもらえるのではないか。このセッションが掲げる「第三の視点」という副題から、このような期待をもってここに足を運んだ方もいらっしやるに違いない。確かに今回、アメリカ、韓国、ヨーロッパからゲストを招き、日中関係について論じてもらおうという企画者の最初の動機はこのあたりにあった。しかし、少し考えてみれば分かることだが、そもそも日本国内でも中国および日中関係に対する見方はさまざまであり、決して一つに収斂するはずがない。中国でも近年、対日「新思考」外交を提唱する識者——今回のゲスト、馮昭奎氏もその一人と見なされる——が現われ、中国の対日世論も決して一枚岩ではないことが示された。固定的な「日本の視点」「中国の視点」などが一種の虚構に属すものであるからには、上述のごとき「第三の視点」も実はレトリック以上の意味をもたないことになる。

「第三の視点から見る」というとき、私たちにとって貴重なのは「距離感」である。ワシントンからの距離、ソウルからの距離、ヨーロッパからの距離——この距離はもちろん単なる物理的な距離ではない。心理的な距離、戦略的な距離、文化価値的な距離などを含めた複合的な「距離感」の違いによって、その目に映じる日中関係の陰影も異なってくるはずである。日本と中国に住む者にとって、日中間の大小さまざまな出来事について知識を増やす機会が多いものの、この「距離感」を自ら獲得することは難しい。アメリカ、韓国、ヨーロッパからのゲストが今回のセッションのために準備した各ペーパーは、いずれも各々独自の「距離感」を帯びたパースペクティブ（遠近法）から見える日中関係の諸相

を私たちに提示してくれる。

楊大慶氏によるワシントンからのパースペクティブは、一定の緊張をはらむ日中関係はアメリカの東アジア戦略にとって所与の条件であるとともに、少なくとも当分の間はアメリカにとっての望ましい状態であることを推測させてくれる。そうだとすれば、「政冷経熱」の日中関係の現状は、アメリカにとってはそれほど悪い状態ではないのだろう。いったいアメリカはどの程度の緊張状態を許容範囲とするのだろうか。

金容徳氏のソウルからのパースペクティブによれば、東アジア諸国（とりわけ韓国－中国－日本）が相互信頼関係を構築していくためには、それまでの長い歴史的交渉のなかで形成されてきた相互認識を無視することはできない。健全な相互認識はまっとうな歴史認識の基礎の上に打ち立てられる必要があり、それを政治理念や政略によって歪めたり、隠蔽したりしてはならない。これはとりわけ日本には重い指摘である。しかし、近年の日本では、「正しい歴史認識」を求めるアジア近隣からの声を「押し付け」と感じ、かえって反発するムードが高まっている。これはどこに問題があるのだろうか。

ドリフテ氏のヨーロッパからのパースペクティブには、その物理的距離の遠さとともに東西分裂を克服したヨーロッパの経験が反映しているように思われる。西側からの関与政策が冷戦の終結、東西ドイツの統一を促したように、日本の中国に対する関与政策（ODA供与をはじめとする近代化支援など）は、はたして中国の体制移行と東アジアの平和的秩序の形成にどのくらい貢献するものか。関与政策が失敗すればもとよりのこと、それが成功したとしても、かえって日中関係の緊張の新たな要因を生み出すのではないかという指摘は、なかなかスリリングな問いかけである。

もちろん日中関係の担い手は日中双方の国民と指導者たちであり、その改善も私たち自身の手によるほかはない。しかし、日中関係はまた日本と中国だけに関わる事柄ではない。近年「世界のなかの日中関係」という表現をしばしば目にするようになった。これは日中関係のもつ世界的な重要性、とりわけ東アジア地域の平和と秩序形成における決定的重要性を示唆するものである。日中双方において「世界のなかの日中関係」を展望しようとするなら、「第三の視点」が提供してくれる「距離感」は、「自己の視点」を相対化して眺めるための貴重な拠り所となるに違いない。